京都月並発句合

――化政・天保期――

*永井一彰

筆者はこれまでにいくつかの拙稿に於て宝暦から寛政までの京都宗匠による月並発句合を取り上げ、主に入選句披露摺り物（以下「丁摺」と言う）を手がかりとしてそのありようを考察して来たのであるが、折々に痛感したのは丁摺をはじめ京都の月並発句合関係の資料はなかなか目につかないということであった。その事情は化政・天保期についても同じで、手許にある片々たる丁摺集を見てもこの時期月並発句合はずいぶん賑々しく興行されているはずなのに、資料は一向に増える気配を見せない。それはひとえに筆者の調査不足によること言うまでもないが、一つの理由として、京都の月並発句合では月刊の丁摺を数年分まとめて合綴し通常の俳書仕立てにして刊行することが多いということがあげられる。そのように合綴刊行された丁摺集は一見通常の俳書と変わらない。従って、図書館・古本屋の目録などに於ても一般の俳書と同様の意識で分類・掲載され、原本を見ない限りは発見が甚だ困難なのである。手許のわずかな資料ではとうてい史的論考をなすには至らない。よってこの稿では、管見に入った化政・天保期の京都宗匠による月並発句合の丁摺集をとりあえず整理し、併せて図版なども添えて示し、同様の資料の所在につき広く御教示を願う次第である。

『新選俳諧發句集』

上賀茂神社三手文庫蔵。中本写本一冊。全七八丁、墨付七八丁。共表紙の左肩に「新選　俳諧發句集」と本文と同筆にて墨書。筆者は不詳であるが、同じ三手文庫蔵の写本『俳諧井手の玉河　初編』と筆蹟は同じで、そちらには「浮雪」の陰刻朱印が認められる。浮雪は後述の〔俳諧井出玉川　四編〕によれば下鴨の人。『新選俳諧發句集』は嘯山系の判者による各種発句合の丁摺の写しであるが、ここに記録されるすべての催しに浮雪は入選しており、この書の筆者は彼である可能性が大きい。序・跋・奥書などは見当らず書写年代も不明であるが、中に「壬戌年大小折句寸砂評」の催しがあり、判者の顔ぶれから見ても享和二年前後興行の発句合丁摺を写したものと考えることに異存はないと思われる。この書に記録された発句合を月並及び臨時の奉納奉額・その他に分け、記載順に整理してみると次のようなものがある。

〈月並発句合〉

①寺町筋違橋不動明王月次奉燈両評　題二月之部　判者深草舎露山・粛斎雲臥

＊国文学研究室（昭和61年9月20日受理）

②同右　題三月之部　唱花坊其風・粛斎雲臥評
③祇園社月並奉納両評　千樹亭梅斜・玉竜舎寸砂評　二月分　題釈奠・糸桜・帰雁・焼野・陽炎　惣句六百余吟――五・六月を除き十二月分まであり
④水火天満宮九百年忌千燈ニ付奉燈　題正月之部　睦斎寸砂評
⑤北野天満宮奉納互評立評　（二月分）　弄時庵斗雪・寸砂評
⑥下御霊社奉納月次両評　梅斜・寸砂評　正月分　題初日・春の草・鶯・春の雪・手毬　惣句五百吟――八月分まであり
⑦幸神奉燈月並　寸砂評　題初桜・水鶏・稲莚・雪吹・シキ社
⑧伏見海道地蔵尊奉納月次　題十月之部　千樹亭梅斜評

右のうち、③⑥は普通の季題五による奉納月並発句合。各月惣句数をあげるが、③は少ない月で二百五十余、多い月で六百余、⑥は三百八十余から五百三十余。この二つの発句合は判者が同じであり、あるいは年度により奉納先を変える趣向の催しであったかと思われる。なお、③⑥は各月の標題下に「但丁摺十四章抜萃之外」（③正月）「丁摺十四句之外」（③四月）「丁摺十四句ノ次」（③七月）「但十四句丁摺之外」（⑥二月）などという付注がある。言うところを信ずれば、この二つの月並発句合に於ては丁摺に洩れた句、つまり落選句の中からいま一度秀吟を拾って披露するという二段構えの選をしていたようで、ここに記されたのは二回目の選による秀吟ということになろう。「題二月之部」などとする①②④⑧は入選句を調べてみると、すべて当季自由題による催し。特にそれを断わらない⑤も同じである。また、⑦は月並発句合でありながら、四季にわたる題を指定している点が極めて珍しい。以上①～⑧は、すべて首（秀一）を冒頭にあげ軸（尾）を末尾に置くという入選句配列法を採っている。

〈臨時の奉納・奉額発句合〉
⑨奉額赤山社発句合　題四季千句集　評者靖斎李流
⑩御霊社奉納　題秋之部　傘方軒其川評
⑪今出川寺町上ル赤塚氏境内地蔵尊奉額四評　央更舎幽石・滄浪居李流・玉竜舎寸砂・芳草亭漣月評　題花・時鳥・月・雪・四季釈教　惣句八百吟
⑫出町升形口下ル綿や小祠稲荷社奉納　評者斜日庵春芝　題葛水・綿の花・蝿・月涼・シキ神祇
⑬革堂奉額　題春之部　逸斎子望考　惣句六百四十余吟
⑭白川天神宮奉納　題秋之部　芳草亭漣月評
⑮安井金比羅奉額　題四季　滄浪居李流選　惣句六百余吟之内

入選句の配列はいずれも①～⑧に同じ。⑨⑪⑮は四季題による催しで臨時の発句合と見られるが、⑩⑫⑬⑭は季節毎の催しと思われ、月並発句合の可能性もないわけではない。なお、これ以外にも⑯「壬戌大小折句寸砂評」⑰「良斎子龍・散斎之英両評相撲抜萃」なども記録されている。

入選作者は①から⑯を通じて京と山城各地で殆んどを占め、その他としては丹波・浪花・近江・若狭が若干名見えるのみである。

〔俳諧井出玉川四編〕　図1

藤田真一氏蔵。中本一冊。文化六己巳年春入江斗雪序。京都橘仙堂善兵衛梓。題簽はないが、序文中に「玉川の句集も廿余年がほど一ケ月もさはることなく（略）こたび四篇めの小冊をなす。」とあるところから、寛政六年に初編が刊行された『俳諧井出玉川』の第四編たることは疑う余地はない。全七四丁のうち序文一丁を除き、残りはすべて

月並発句合の丁摺。図版からもおわかりいただけると思うが、丁摺にはすべて墨色の匡郭があり、板芯下部に月数を、冒頭には「子正月」というように十二支の標示がしてある。それによれば、この書に収録するのは文化元子年正月～十一月分、文化二丑年正月～十一月分（含閏八月）、文化三寅年正月～十一月分、文化四卯年正月～十一月分、文化五辰年正月～十一月分（含閏六月）及び辰年の年籠分である。弄時庵入江斗雪判の月並発句合は『俳諧井出玉川 初編』に収録される寛政元年から四年までの分もそうであったが、閏月があればその月も興行をし、師走は興行しないのを原則としている。丁摺の数は文化元～四年分は各月一丁摺（但し、文化二年九月のみ二丁摺）、文化五年が各月二丁摺（但し、年籠は三丁摺）。入選句は一丁摺の月が20章、二丁摺の月は42章、辰年籠61章。巻頭・巻軸の標示、及び判者斗雪の追加吟はない。季題は月並五題（但し、文化元年四月のみ六題）で各月丁摺の冒頭に明示。図版に続く子年二～五月分をあげてみよう。

二月題　水口祭・出代・菜の花・蝶・春の月
三月題　雛・順峰・永日・鷹ノ巣・山桜
四月題　卯の花・蝸・袋角・飛蟻・酒煮・シキ淀君賛
五月題　帷子・印地打・鵜飼・五月闇・末摘花

概ね普通の季題であるが、二、三ケ月に一度「シキ日本武尊讃」「シキ淀君賛」といった趣向の題を一つ混える。この出題形式は寛政元年以降、全くかわっていない。入選作者は五年間を通じ、京を中心に山城各地・近江・丹後・丹波・讃岐が目立ち、あとは江戸・河内・摂津・伯耆が散見する程度。『俳諧井出玉川 初編』と較べ、特に大きな変化は認められない。

『誹諧傘の下』　図2

半紙本二冊。表紙中央上部に単辺原題簽「誹諧傘の下　乾」「誹諧傘の下　坤」。文化二乙丑孟夏平安幾風房伴の宗盈序。漣月跋。刊記「文化第二季乙丑夏四月吉辰　伴松葺蔵　書肆 皇都柳馬場二條上　金屋宗助」。この書の成り立ちについては、宗盈の自序に

…愚老及ばぬながら、親しくかたらふ雅子、又は社中の誰かれ、月々の發句、付合の高判を抜萃し、故篋に蔵むるに、稍く百千をもて筭ふるに至る。徒に螺にあたえむより、四方の文雅の諸君に笑を献じ、将此道に志給ふ少童児の、鳩車糖粭に換るの一助ともなりなば、詠唫士の本意なりと、梓に壽くこととなりぬ、…

とあるのによって明らか。乾巻には月並発句合の丁摺を合綴、坤巻には高点付句を収録している。乾巻に合綴する丁摺は四十二丁。丁付は通しで板芯下部に一～四十二と入れるが、若干の乱れがあり、二十一とあるべきところを二十二と、二十五を十五と、三十一を三十八と、三十六を三十七と誤る。従って、丁付十五・二十二・三十七・三十八が各二丁あるが、内容はそれぞれ別のものである。図版に例示したのは第一丁。各丁に墨色の匡郭があり、冒頭に題をあげ次に巻首（秀逸）の句を三行書きにしてその下には巻首の句に因んだ挿絵、以下に句を並べて巻軸に至る配列の仕方で、最後に伴松庵また幾風房として判者宗盈の追吟を添える。丁摺四十二丁のうち丁付三十九、四十のみ二丁摺、他は各回一丁摺で計四十一回分。うち春の題によるものが丁付一から十一まで計十一回分。図版のように多くは普通の季題四による催しであるが、中に「題春神祇」(二)「題春居所」(十)「題春植物」(十一)という趣向題一による興行が混じる。夏の題によるものが丁付十二から二十二まで計十一回分、うち趣向題一の催し三回。秋は丁付三

十三から三十二まで十回分、うち趣向題一の催し三回。冬は丁付三十三から四十まで七回分、うち三十九、四十の二丁は「冬之名所・釈教・恋」の趣向題三による興行。四十一丁は秋・冬計十二題の催し、四十二丁は「春ノ日・夏ノ月・秋ノ風・冬ノ雨」という四季題による催しである。丁摺のいずれにも干支の記載はなく、また普通の季題による催しと趣向題による催しとの関連も不明であるが、文化二年四月という序文・刊記から単純に考えて、それ以前二～三年分の丁摺と見てよかろう。入選句は丁付一の20章、丁付三十九・四十の合51章を除き、他はすべて各回21章。入選作者は京が圧倒的に多く、丹後・丹波がそれに続き、他には近江・尾府・東武苦千名を数えるに留まる。

〔逸題丁摺集〕　図3

中本一冊。表紙中央上部に単辺原題簽が残るが剥落甚しく、下半部の「〇〇れミの　完」のみ判読可。巻末の二・三丁及び後表紙を欠き、四十九丁残存。原本に丁付がないので仮に一～四十九とする。ただし、十五丁は十四丁と同じもので実質には四十八丁である。序跋・刊記なし。第一丁初行下部に「伏水玉鱗舎千柳選」とあり、千柳の選になる月並発句合の丁摺を合綴刊行したものであることが知られる。第一丁・十三丁・二十六丁・三十八丁の各初行にそれぞれ「春之部」「卯夏之部」「寅秋之部」「寅冬之部」と標題。月数などの記載はないが、四十四～四十六が一回分三丁摺である他は各回二丁摺（ただし最終回は四十九の初丁のみ残存）で、春・夏・秋・冬それぞれ六回分を収録しており、寅・卯両年の計二十四ケ月分であろうことは容易に推測される。選者・入選作者・丁摺の形式などからこの寅・卯両年は文化三・四年であるととりあえず判断しておくが、寛政六・七年の可能性もないわけではない。図版は第三丁表と第五丁裏。丁摺にはすべて墨色の匡郭があり、冒頭に首（秀一）を末尾に軸（尾）を置く形式で選者の追加吟は添えない。季題も示していないが、入選句に徹するに当季自由題。入選句数は四十四～四十六の三丁摺一回分65章それに初丁のみしか残らず句数不明の最終回を除き、他は42乃至43章。なお、第一丁表匡郭外右下にかすかに「惣句千余…」の記述を読みとることができ、一つの参考にはなろう。入選作者は、京71名・伏水47・淀17・深草13・醍醐6・大仏4・稲荷4・洛東1・上鳥羽1・城南各地12・近江12・丹後5・宇治田原2・東武1・その他不明6という分布を示す。京都作者が最も多いが71名中の最多入選は三好の20章、それに対し伏水の作者は47名であるが卜天の51章を最高に20章以上入選している者が9名もいる。選者が伏水の人ということもあって伏水作者の思い入れが強かったようで、発句合の中心的基盤はむしろ伏水にあったものと思われる。

『和哥葉集』

天理図書館綿屋文庫蔵。半紙本写本十一冊。分類番号は、わ・203・77の1～10となっており番号と冊数が一致しないが、それは77・2と分類される同一書名の写本が二冊存在するからである。混乱を避けるために、この二冊を仮に77・2上、77・2下としておく。全十一冊のうち77・7～9を除くすべてに「和哥葉集」と書題簽があり、各冊題簽下部に次のように副題を記す。

1　馬田江抜書
2上　平安諸家抜書
2下　平安諸家抜書
3　午河州大坂丁摺
4　熱田三哥仙

5　枯魚堂抜書
6　古人句集下
10　萬治歌合

書写年代及び筆者は77・7の奥に「文化八未八月五日　沙村書」とあり、とりあえずそれを信じてよかろう。さて『和哥葉集』全十一冊の内容であるが、題簽のない7・8・9の三冊は「和歌三神之秘訣」など和歌関係の伝書の写し、10も副題の通り「万治歌合」の写し。残り七点が俳諧であるが、3は厳密に言えば写本ではなく午年（文化七年であろう）の俳諧堂耒耜・馬田江鵜城の月並発句合丁摺を綴じ合わせたもの。4は『熱田三歌仙』の写し、6は『俳諧温故集』の抄出。京都宗匠による発句合の記録があるのは1・2上・2下・5の四冊である。

1『馬田江抜書』の前半部は、標題の如く馬田江鵜城ら大坂宗匠による四月から七月までの月並発句合丁摺の写しで、その後半部より「是より平安之部」として2下『平安諸家抜書』の巻末まで京都宗匠による発句合丁摺の写しがある。仮に通し番号を付して次に列挙する。

①佳菊庵鸞太選（題　水見舞・南風・蚤取）
②佳菊庵鸞太評（題　午睡・金魚・弦召）
③同　評（題　生漬・蝉・麻・浮人形・撫子・あさ習・一重帯・油でり・蝿叩・流星）
④清水寺奉額　椿花亭定雅・松林庵倭泉評
　題植物・水辺・生類・降物
⑤佳菊鸞太選　題神輿橋・甘酒・雨祝
⑥佳菊鸞太選　題蝉・石菖・豆茶
⑦奉額松尾櫟谷大明神　庚午初冬　佳菊庵・春夜楼若夢評
　題蝶・涼・菊・冴
⑧佳菊庵角力合　題鹿小屋・綿虫・焼茸
　同　後会　題臼すり・番船・菊屋形
　同　満会　題ばい廻し・秋日和・餅祭
⑨管古追善・佳菊庵・松林庵倭泉評　題梅・夏書・秋雨・寒・ヲリ句
　クヤウ
⑩井向追善地蔵堂額　深雪庵羅芙評　題汐干・蛍・菊・雪・シキ釈教
⑪枯魚堂梅価宗匠評　題寒さ・書始・柳
⑫佳菊庵鸞太宗匠評　題鰒・霞・宝曳
⑬九窓亭芦雪宗匠評　題頭巾・朧月・鶯
⑭菊渓庵宗也宗匠評　題煤掃・菫・海苔
⑮椿花亭定雅宗匠評　題帰リ花・蛙・出代
⑯春夜楼若夢宗匠評　題除夜・二の替・茶摘

①～③は1に、④～⑩は2上に、⑪～⑯は2下に収録。⑦の干支「庚午」は文化七年で、『和哥葉集』の筆写年代と併せ考えてみると、①～⑯は文化七・八年頃興行の発句合と見てよかろう。このうち、①②⑤⑥は月並発句合とおぼしき出題である。③についてはよくわからない。④⑦⑨⑩は明らかに臨時の発句合である。また、2下一冊に収められている⑪～⑯は、各回とも冬一題春二題による興行でやや趣を異にしており、あるいは特別な趣向による臨時の発句合であったかと思われる。入選作者は①～⑮を通じて京が殆んどで、他には伏見・亀山・丹州・西湖・大坂が各1・2名散見するのみである。

〔京都月並丁摺集〕Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ　図4

中本三冊。京都宗匠興行の月並発句合丁摺を紙縒で綴じ合わせたもの

三点。もとより表紙・書名はなく、仮に標題のように名付けておく。整理してみると、指月庵志桃選・五調斎歌鳳選・梅化房百朶選の三種に分けることが出来る。丁摺の形式はどれもよく似ており、すべてに墨色匡郭がある。また、殆んどの丁摺板芯に申・酉・戌・亥・子と彫ってあり、Ⅰに収録する歌鳳選の一枚には「文化十三丙子年正月之吟」という標題が認められるので、この三点に綴じ合わされた丁摺は文化九年から十三年までのものと考えてよかろう。

〈志桃選〉

文化九年二・八月分、十年七・十一・十二月分、十一年正・二・四～七・九～十二月分、十二年正～九・十一・十二月分の丁摺が残る。文化九～十一年分は各月一丁摺。図版は九年二月分であるが、「二月ノ部　洛指月庵志桃宗匠選」などと標題し、冒頭に秀一（首一また首）を末尾に軸（尾）を置く形式で、選者の追加吟は添えない。また、各月丁摺の表右下匡郭外に「六百余句ノ内」などと惣句数を記してある。惣句数は少ない月で「四百余章」（十年十二月）多い月で「一千八拾五句」（十二年六月）。入選句は一丁摺の月は26章（九年二月のみ25章）、二丁摺の月は51章である。中には丁摺の裏左上匡郭外に「五日〆切不延」（九年二・八月）「毎月五日〆切不延」（十年七・十二月）と〆切日を入れているものもある。なお、丁摺に季題を明示しないが、入選句に徴するに当季自由題。入選作者は京が殆んどで、他には丹波若干名と若狭・江戸各一名を加えるのみ。作者肩書に処々「三室連・小町連・時雨連」などとあるのが注目される。

〈歌鳳選〉

文化十一年正～四・六～八・十二月分、十二年正～三・五月分、文化十三年正～五月分の丁摺がある。文化十一・十二年分は各月一丁摺、十三年分は二丁摺。「正月之吟　洛上五調斎選（十一年正月）」などと標題し、冒頭に「首」を末尾に「尾」を置く形式で最後に歌鳳の追加吟を添える。入選句は一丁摺の月は26章、二丁摺の月は40または41章。十一年分（除十二月）のみ各丁表右下匡郭外に惣句数を記す。四百乃至五百余。また、丁摺裏左上匡郭外に「十日〆切」とするものが多い。季題はやはり当季自由題。入選作者は京（「カモ」7名を含む）が殆んどで、尾張・丹州・若狭が各1・2名見えるのみ。

〈百朶選〉

文化十一年七～十二月分、十二年正～五月分の丁摺がある。すべて各月一丁摺。「七月吟　洛上梅化房選」（十一年七月）などと標題し、「首」から「尾」まで句を配列。十一年分には選者の追加吟を添える。入選句は各月26または28章。十一年七月～十一月分のみ丁摺表右下匡郭外に惣句数を記す。四百及至六百余。うち、七・八月の丁摺裏左上匡郭外に「八月十日〆切」「九月十日〆切」とある。これも当季自由題。入選作者は江戸・近江・若狭各1名以外は京・伏水・深草ですべてを占める。

『われも草』　図5・6

半紙本、天・地・人の三冊。各冊左肩に単辺原題簽が残るが剥落甚しく、それぞれ「〇〇もくさ　天」「われもく〇　地」「わ〇〇〇〇人」と一部分のみ判読可。しかし、天巻第一丁表に「われも草」と陰刻し、その裏に「東国侍従基貞卿鸞求」という記載及び基貞の方形陽刻朱印があり、この基貞書の内題によって書名は明らか。この内題以外に序跋・刊記はないが、内容は佳菊庵鸞太の判になる月並発句合の丁

摺十八年分を合綴刊行したものである。丁付は板芯下部に入れ、天・地・人を通して「初～三百八十二・后一～后卅四」。架蔵本には数葉の落丁があるが、早稲田大学図書館に天・地両巻が残り、これによって丁付百五十九のわずか一丁を除き全て補うことができる。現存合計四〇六丁。なお、丁付と丁数が合わないのは天巻の丁付に若干の乱れがあるためである。

さて、四〇六丁の中には板芯に干支を入れるものがある。最大の決め手になるのは二百九丁の「文政六発末正月」であるが、その他「戊」（廿五丁）「子」（七十三丁）「乙酉」（二百六十七丁）「戊」（二百九十一丁）「丁亥」（三百十五丁）「戊子」（三百卅九丁）「庚寅」（后一）「卯」（后廿三）などの標示を手がかりに整理してみると、各巻収録の丁摺は次の年代のものであることが知られる。

天巻　文化十年正月～文化十三年十二月
地巻　文政元年正月～文政六年十二月
人巻　文政七年正月～天保二年七月

文化十四年分が見当らないのが疑問であるが、これは早大本も同じで、この年は興行がなかったと考えるべきであろう。各月の丁摺数は、文化十二年十二月の三丁摺、文政元年十一・十二月の合三丁摺、文政十二年十一・十二月の合二丁摺、天保二年正～三月の合四丁摺、それに後述する文化十三年一年分を除き、他はすべて各月二丁摺である。図版5は文化十一年正月分巻頭（廿五丁表）と巻末（廿六丁裏）であるが、冒頭に季題七（うち「初老の賀」という趣向題一を含む）をあげ、続いて52章の入選句を並べて末尾の句を「軸」とする。そのあとに「初老の賀」で詠まれた入選句だけまとめて8章配列し、終りに鸞太の追加吟を添える。そして、終行に「点坐」として芦錐以下五人の名をあげている。この形式は文化十年正月から文化十二年十二月までの丁摺すべてに共通している。ところで、丁摺の例として取りあげた文化十一年分についてはたまたま募句ちらしが現存する。『奈良大学紀要』十四号収録の拙稿に翻刻紹介しておいたが、ここでは図版6として原点を掲載しておこう。このちらしから次のようなことがわかる。

- 通年兼題の興行であったこと。
- 趣向の題には当季の制約があったこと。
- 七題のうち三題を選んで句を詠み、三句を一連として応募するきまりとなっていたこと。
- 点料は三句一連にて二分（にん）を要したこと。
- 締切は前月二十日であったこと。
- 丁摺に掲載される入選句は十五点以上であったこと。

なお、丁摺に点座として名のあげられた五名は三句一連合計点の上位者、つまりちらしに言う「高点巻其五内」に入って「鹿景進上」の対照となる連中と考えられる。丁摺の形式が共通することから判断して、文化十年から十二年まで鸞太判の月並発句合はおよそ右のような興行形態で催されたと考えてよかろう。この間の入選句数は、十年正月58章、二月59章、十二年十一月49章、十二月48章を例外として他はすべて各月60章である。

さて、文化十三年になると丁摺の形式に変化が見られる。まず正～三月分は各月一丁摺、冒頭に

正月之部　辻君の賛
二月之部　猫の賛
三月之部　琴を習ふ句

と趣向題一つだけをあげ、前年までのような季題を記していない。この三ケ月分は入選句から判断して当季自由題による催し。また、四～六月分・七～九月分・十～十二月分はそれぞれ合五丁にわたり、この

間丁摺は月刊ではなく季刊となっている。ただし、四月以降は各月普通の題四と趣向題一の計五題を冒頭に明示。入選句数は正～三月が各30章、四～六月が各50章、七～十二月が各60章。翌文化十四年の丁摺が一年分見当らないことと考え併せてみると、文化十二年末から十四年にかけて月並発句合の興行形態を変更し、その規模を縮少せざるを得ないなんらかの事情が判者鷺太の側に生じたものと思われる。

文政元年の丁摺は文化十三年正～三月と同じく月数と趣向題一を冒頭にあげる形式で、当季自由題による興行。入選句数は正月59章、十一月53章、十二月34章、他の月はすべて60章。文政二年以降は趣向の題もなくなり、すべて当季自由題による興行へと変わって行き、丁摺の冒頭に題が記されることは一切なくなる。この間の入選句数は、文政三年正月62章、天保二年正～三月合125章を除き、他はすべて各月61章である。なお、入選作者は十八年間を通じて京・近江・丹波・山城各地が圧倒的に多く、それ以外には江戸・美濃・浪花・河内・紀伊・播磨・但馬・伊予・安芸などが若干名見えるのみである。

『はとのつゑ』　図7

半紙本一冊。表紙中央上部に単辺原題簽「はとのつゑ」。文政十二丑如月月下堂序。京橋仙堂善兵衛梓。月下堂の序文中に

……ここに蘿蔔苑主人くさぐさの句を撰て赤八幡の御社へ備へまつり（略）そのおろしものなれるをミとせがほど貯へ置るが、こたび世にひろめ一冊となし好人が腹をこやさむ……

とあるように、蘿蔔苑若雅選の月並奉納発句合の丁摺を三年分合綴刊行したもの。序文一丁と若雅らの連句及び当代諸家の吟を収録した巻末の三丁には丁付なし。丁摺は全三十六丁を収め、板芯に「戊正～戊十二」「正　若～十二　若」「子正～子十二」と入れる。月下堂の序文が文政十二丑年二月であるから、戊は文政九年、子は文政十一年、十二支を入れないその間の十二丁は文政十年の分であろう。各年とも各月一丁摺で墨色の匡郭がある。図版は文政九年正月分である。冒頭に「正月之吟　蘿蔔苑撰」として「首」「軸」から入選句23章を並べ、最後に若雅の追加吟を添える形式。ただし、蘿蔔苑撰とあるのはこの年の正月分のみ。また、入選句の配列は「首」（秀一・首一）を冒頭に、「軸」（尾・大尾）を末尾に置く形式ものもある。入選句数はすべての月23章。季題を示さないが、入選句から判断して当季自由題であったと思われる。入選作者は、京84名、下鳥羽・岩倉・深泥池各1、伊賀名張7、若狭6、丹波5、西湖3という分布。因みに入選句数の特に多い作者を拾い出してみると、京の月晨69章・李角65・北舟53・志朝50・周伯37・瑞斗33・春楽31・路鳥24、伊賀名張の丸松31・松園28といったところが目立ち、この10名で実に全入選句の約半数を占めている計算になる。

『枯魚七部余財集』　図8

天理図書館綿屋文庫蔵。中本一冊。表紙中央に無辺後補題簽があり「枯魚七部余財集 己丑全」と墨書。己丑は文政十二年で、この年の伏見枯魚堂梅価選の月並発句合丁摺二十四丁を綴じ合わせたもの。板芯下部に丁付、一～二十四。各月二丁摺。後表紙見返しにこの書の所蔵者とおぼしき「幽香堂梅人」の署名があり、そのすぐ下に「竜野下モ町　栄屋宗左エ門」の陽刻朱印が認められる。位置関係からしてこの朱印は梅人のものと思われるが、入選作者を調べてみると「ハリマタツノ」の肩書で二・四・五・七・八・十一・十二月に梅人の名が見える。これは同一人物と見るべく、『枯魚七部余財集』は毎月手許に届けられた丁摺を梅人が綴じ合わせたものと考えてよかろう。なお、第

一丁表右下にある「播竜野　小幡氏」の陽刻朱印も梅人のものである可能性が大きい。

丁摺は板芯上部に「枯魚堂月次」と彫った半丁十二行の罫紙を使用している。罫紙は丁付一・二は海老茶色摺、三～十二・十五～十八・二十三・二十四は藍色摺で、同一板木により摺られたもの。ただし、丁付は墨色である。十三・十四・十九～二十二は丁摺の写しで、もとより罫線はなく半丁十二行書き。板芯下部の位置に丁付を書きこんである。

図版は正月分の巻頭（一丁表）と巻末（二丁裏）である。最初に「枯魚七部餘財集　呉竹枯魚翁校　春之部」と標題するが、二月以降にこれはなく、右上匡郭外に月数を標示。以下「魁・軸」から入選句を並べる形式は各月に共通するが、正月は末尾に梅価の句を、十二月は杜鵲・枯魚堂の追加吟を添えている。また、各月二丁目裏の匡郭外に「花評之一」として副評による秀逸句一章を添えるが、七月分にはそれがない。入選句数は花評分を除き、正月44章、十二月45章、それ以外はすべて48章。季題は入選句から判断して当季自由題と思われる。入選作者は、近江各地55名・京32・醍醐6・丹波2・丹後1・浪花14・河内1・播磨10・大和古市5・伊賀名張5・伊勢亀山10・越中魚津10・若狭7・江戸1となっており、京よりもその周辺地域を興行の基盤としていた形跡が著しい。

『俳諧日々草』　図9

中本、乾・坤二冊。左肩に単辺原題簽あり。坤巻は「俳諧ひゝ〳〵草　坤」と完備しているが、乾巻は剥落甚しく「〇〇日々草　〇」のみ判読可。乾巻の見返しに「天保十三年壬寅正月發兑／柳骨蒼宗匠編／俳諧日々草」と、また序文中に「こは月〳〵の句合を槃季（つゝこ）にのぼしツ、日々の流行をしもわすれずば、日々草と呼べし」とある。天保丑十二月鷺岱序。敬布序。天保十三年壬寅正月皇都書林野田治兵衛他三軒刊。天保十二丑年の十三ケ月分（含閏正月）の柳骨庵馬秀選月並発句合の丁摺六十一丁を合綴刊行したものである。丁摺には各巻毎に通しで板芯下部に丁付を入れる。乾巻は上一～上十七・上十八ノ廿四・上廿五～上四十、坤巻は下一～下十六・下十七ノ廿二・下廿三～下三十二。

この書に収録された馬秀選月並発句合の丁摺は今まで取り上げたものとは少し形式が異なっている。図版は丁付上一～上三の正月分。まず初丁表右上匡郭外に惣句数と月数を入れ、冒頭に書名と選者名を入れる。次の閏正月以降は書名の箇所へ「丑閏正月波」などと入り匡郭外の月数標示はないが、むしろ閏正月以降を丁摺の原形とすべきであろう。最初の入選句の肩に「鶴一」とあるのは「鶴の巻」の「首一」の意で、以下二丁表終行の「尾」の句に及ぶ。二丁裏から三丁表までは「亀の巻」の入選句で、配列の仕方は鶴の巻に同じ。鶴・亀の巻をどのように分けているかは不明であるが、いずれにせよ惣句千三百余章を二巻に分けて馬秀が選をしていることは間違いない。三丁裏の半丁分は副評による入選句で、やはり「一」から「尾」に及ぶ。丁摺の上欄について言えば、鶴の巻の冒頭部は「鶴一」の入選句に因んだ挿絵、その裏には選者馬秀の吟、亀の巻巻末部には「点座」としておそらくは二・三章を一連として合計点の上位者10人の名前、そして副評の部には副評者の吟をあげる。その間、二丁表裏の上欄にも句を並べるが、それがどのような基準によるものかは不詳。以上のような丁摺の形式は十二月まで同じであるが、丁摺の枚数にはばらつきがある。それは、例にあげた正月分は副評が一名であったが月によっては二・三名に及び、また惣句数に増減があるからである。月数・惣句数・丁摺の枚数・副評者数を書き出してみると次のようになる。

正月	千三百余章	三丁	一名
閏正	千五百余章	四丁	二名
二月	六千余章	八丁	二名
三月	千六百余章	四丁	二名
四月	千七百余章	五丁	三名
五月	二千二百余章	五丁	二名
六月	千八百余章	四丁	一名
七月	二千百余章	五丁	二名
八月	千九百余章	四丁	二名
九月	二千余章	三丁	一名
十月	二千二百余章	六丁	二名
霜月	千五百余章	三丁	一名
極月	千五百余章	五丁	一名

二月分が惣句数・丁数ともに多いのは「明前老波居士追悼観音堂奉額兼丑二月波」と標題する如く、追善発句合を兼ねた興行であったためである。また、十一月分の副評半丁分は月遅れで十二月分に含めて披露してある。右の表によって、とりわけ惣句数が丁摺の枚数を決定して行くおよその傾向を見てとることができよう。次に入選句数であるが、副評の巻は11章または23章とするものが殆んど、馬秀選鶴・亀の巻にはかなりのばらつきがあり少ない巻で23章多い巻では70章に及ぶ。季題については乾巻見返しに馬秀が「古題新題のさべちなく月毎に混じて」と言う如く、当季自由題。入選作者は、山城各地98名・京67・河内10・近江5・奈良4・越中6・丹州・灘・江戸・豊後各1で、やはり興行の基盤は京にはない。

『倍風歳々集』　図10

小本一冊。共表紙左肩匡郭内に「倍風歳々集」と篆書にて墨摺り。同じく右肩に「甲辰年」の木葉形陽刻朱印がある。序・跋・刊記なし。全十三丁、すべてに墨色の匡郭がある。板芯上部に「蕪汁庵撰」、下部に一～十三と丁付を入れる。甲辰は弘化元年で、この年の蕪汁庵若雅選月並発句合丁摺十二丁を合綴刊行したもの。各月一丁摺、冒頭に「正月の部」と標題し「首」から「軸」(尾)まで入選句を並べ、選者の追加吟は添えない。十三丁は若雅らの半歌仙と追章を収録。季題は当季自由題。入選句は各月21章。入選作者は、下鴨などを含め京が62名・大坂2名・丹波1名。京作者の中には若峯・若海・若吹・若葉・若介・若洞・若天などの名が目立ち、若雅門の京作者を中心とした催しであったと思われる。

『あふみぶり』　図11

中本、上下二冊。架蔵本は題簽が失なわれて残らないが、天理図書館綿屋文庫蔵本には表紙左肩に無辺原題簽あり、それぞれ「あふみふり　上」「あふみふり　下」と墨摺り。上巻見返しに「佳菊鴨坡先生校／淡海風流／皇都書林年々堂」とある。東園殿左近衛権中将藤原基貞卿鸞求序。化辰孟春鴨坡居士鸞岱跋。嘉永二己酉年京都書林年々堂菱屋弥兵衛刊。蛙屋鸞岱選の月並発句合丁摺二年分計四十六丁を合綴刊行したもの。各月二丁摺で、すべてに墨色匡郭あり。丁摺は図版11のように板芯に「近江　辰」と入れるものと、やはり板芯に「あふミ」とある二種類二ケ年分に分けられ、各丁ノドに月数と通しの丁付を入れる。仮に前者をⅠ類、後者をⅡ類としておく。

Ⅰ類は正月から十一月分まで計二十二丁。図版は正月分の巻頭部一

丁表と巻末部二丁裏。二月以降は「二月之部　洛宗匠蛙屋鸞岱翁校」などと標題する。入選句は冒頭に「一」次に「人」を置き「尾」に至り、最後に岱翁の追加を添えるという配列。「尾」は第二位を「人」は第三位を表わすことは言うまでもなかろう。この辰と標示されたⅠ類一年分は嘉永二年の刊記から見て弘化元年と考えてよかろう。Ⅱ類は正月から十二月分まで計二十四丁を収録。冒頭に「あふミぶり　正月之部／平安宗匠蛙屋校」などと標題。二月分のみ「一」「人」の標示をし他には一切それがないが、Ⅰ類と同様の配列と見て特に問題はなかろう。このⅡ類には干支を記さない。しかし、作者の改号を手がかりに少なくもⅠ・Ⅱ類の先後を決することは可能である。Ⅱ類に出る雲鳳・芦風・選友はⅠ類に於てそれぞれ筍方・芦誰・青雲と号を改めており、これによってⅡ類はⅠ類より先行することがわかる。単純に考えてⅡ類はⅠ類の前年、つまり天保十四年と見ておきたい。入選句数は天保十四年四月・弘化元年正月の39章以外はすべて各月40章。季題は入選句から判断して当季自由題。入選作者は洛がわずか5名でその入選句合計8章、他の作者にはすべて肩書がないが、これは書名が示す如く近江の連中と思われる。

※付記　この稿は昭和六十年度交付の奈良大学特別研究費によるところが多い。

図　1

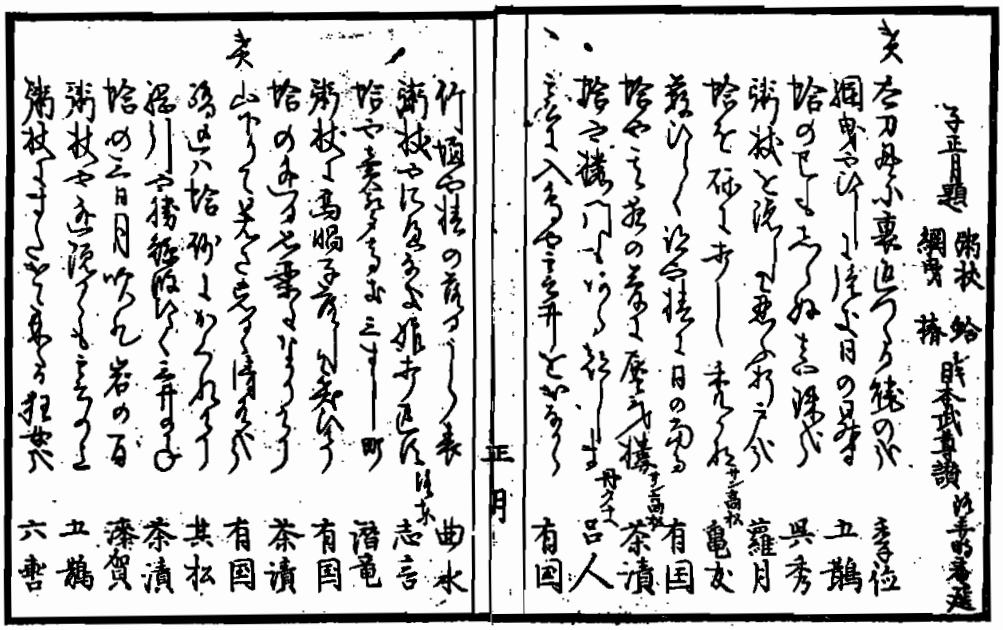


図　2

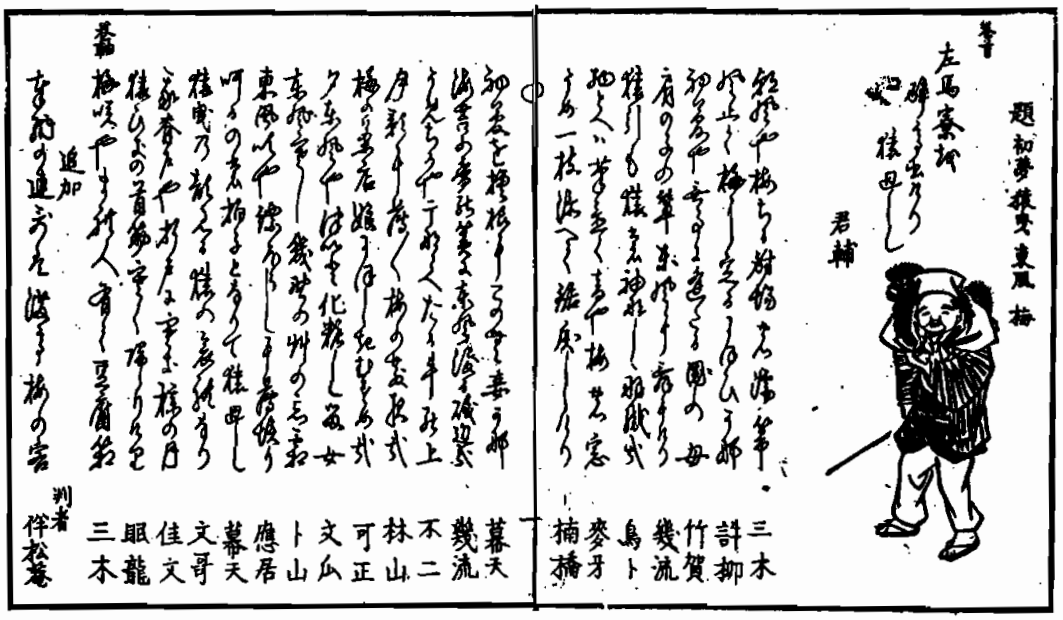


図　3

図　4

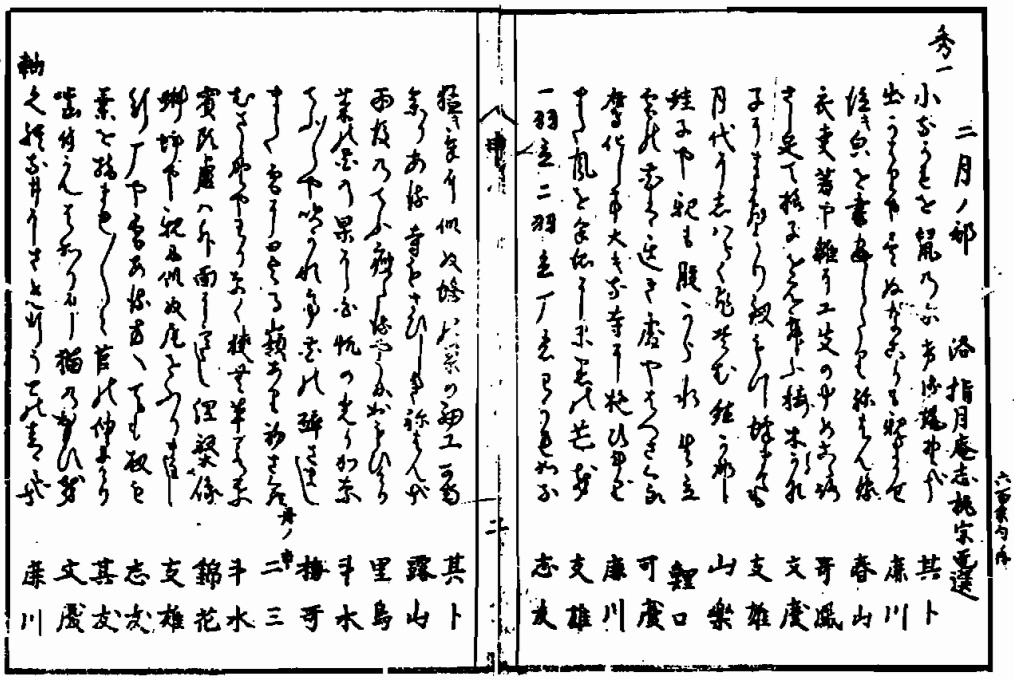


図　5

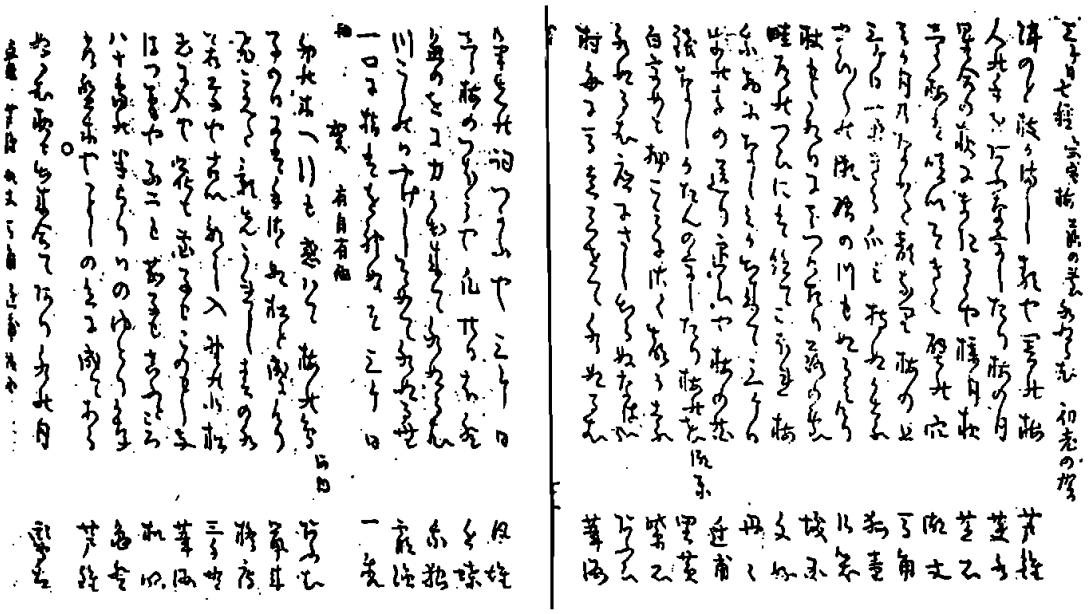


図　6

図　7

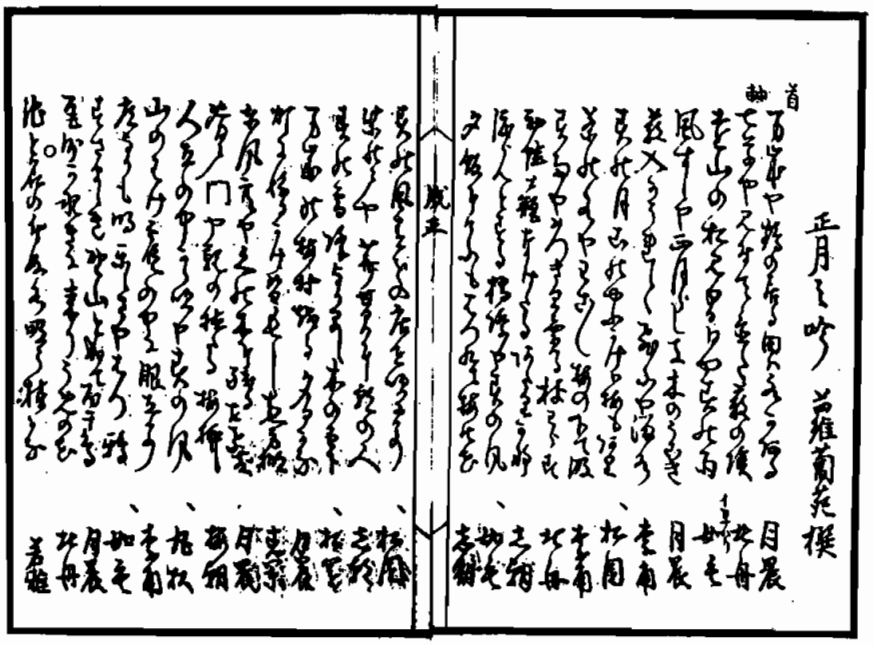


図　8

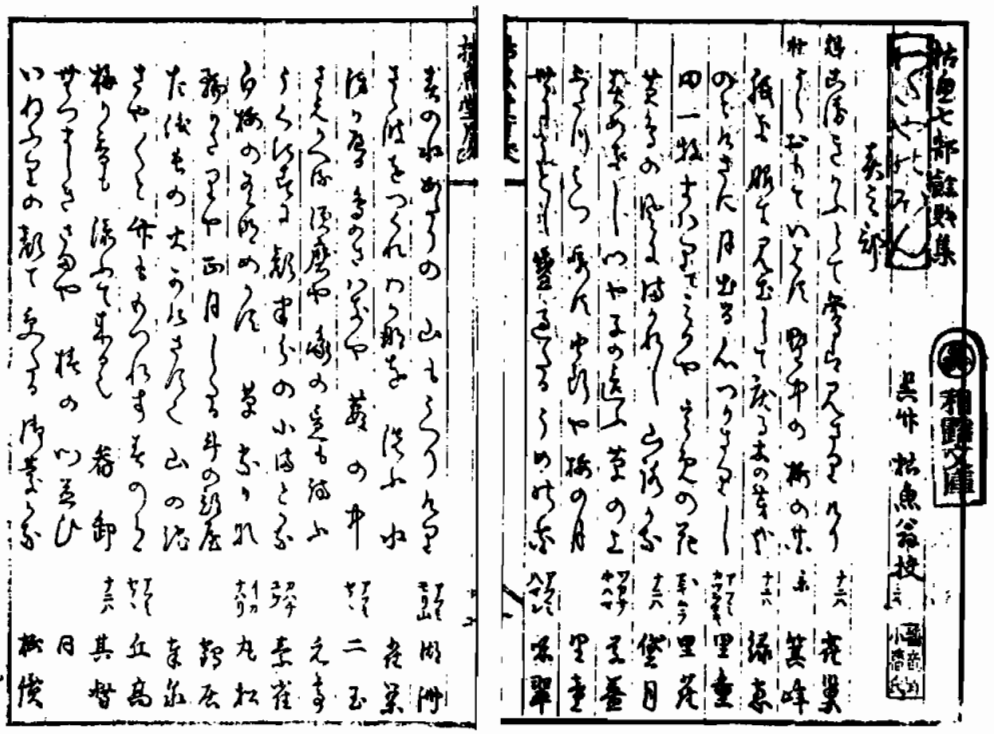


図　9

(1)

(2)

(3)

図　10

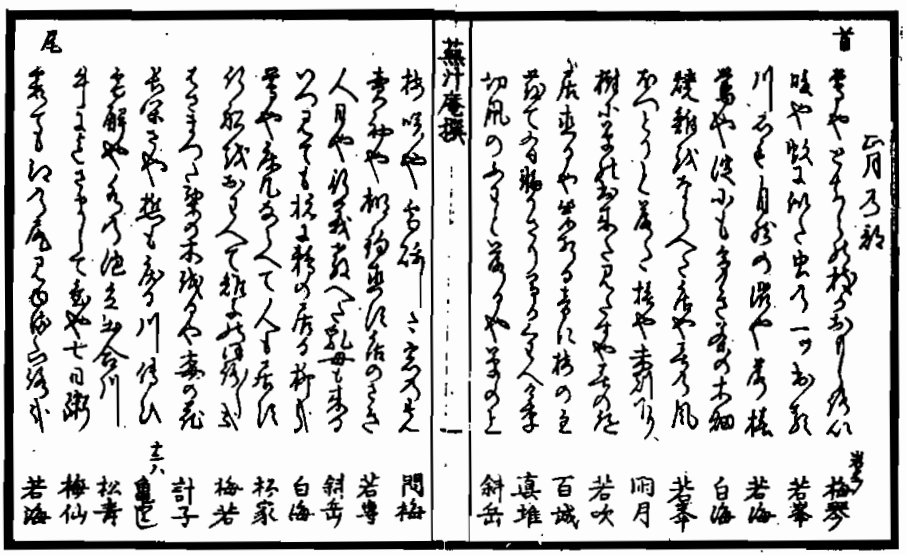
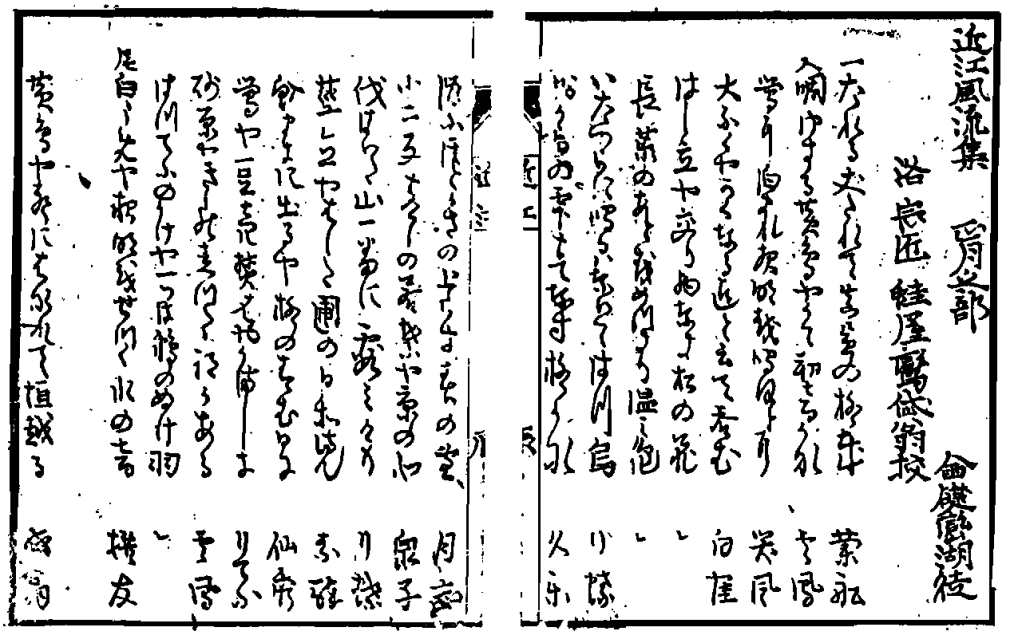


図 11



Kyoto Tsukinami-Hokku-Awase

Kazuaki NAGAI

Summary

This paper is the report of Tsukinami-Hokku-Awase in Kyoto in the late Edo-era.